



TITLE:

マンガにおける異本研究

AUTHOR(S):

安岡, 孝一

CITATION:

安岡, 孝一. マンガにおける異本研究. 情報の構造とメタデータ 2012: 3-20

ISSUE DATE:

2012-02-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217945>

RIGHT:

© Author

マンガにおける異本研究

安岡孝一*

1 はじめに

日本のマンガの多くは、週刊誌や月刊誌等に連載されたのち、単行本としてまとめられる、という出版形態をとっている。しかも、単行本にまとめる際に、フキダシやコマ割り、あるいはストーリーそのものを改変することが、かなり頻繁におこなわれている。すなわち、初出と単行本とが、いわゆる異本の関係にあり、それらの異同を調査することが、マンガ研究の一部をなす、ということである。

本稿では、そのような異同を記述するにあたり、マンガの情報構造を、できるかぎり簡便に反映する方法を探る。具体的には、手塚治虫『三つ目がとおる グリーブの秘密編』の異本を例に、マンガにおける異同について実際に調査をおこない、その異同を記述する方法について考察する。

2 『三つ目がとおる グリーブの秘密編』

手塚治虫は、ほとんど全ての作品においてリライトをおこなっており、したがって、作品の数だけ異本が存在すると言っても過言ではない。1974年から1978年にかけて週刊少年マガジン(講談社)に連載された『三つ目がとおる』も例外ではなく、その中でも「グリーブの秘密編」は、広範囲なリライトが二度に渡っておこなわれた作品である。本稿では、あえて、この『三つ目がとおる グリーブの秘密編』を、異同調査の例として取り上げることにする。

2.1 改題

週刊少年マガジン 1975年6月1日号～8月24日号初出。

講談社コミックス第325巻[KC325]『三つ目がとおる ③』(講談社、1976年3月1日第1刷発行)で単行本化の際、8月17日号・8月24日号掲載分のプロットがカットされた。また、1月19/26日号～3月30日号掲載分の各コマを再構成して「第1章」が作られ、同時に「第2章」～「第5章」の章立てもおこなわれた。さらに、手塚治虫全集108巻[MT108]『三つ目がとおる ⑧』(講談社、1980年5月20日第1刷発行)に収録の際、8月17日号・8月24日号掲載分が復活し、同時に「グリーブの秘密編」というサブタイトルが付けられた。また、フキダシの総ルビは、ほぼ全て削除された。

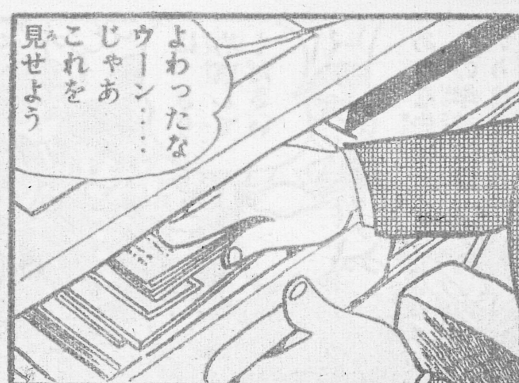
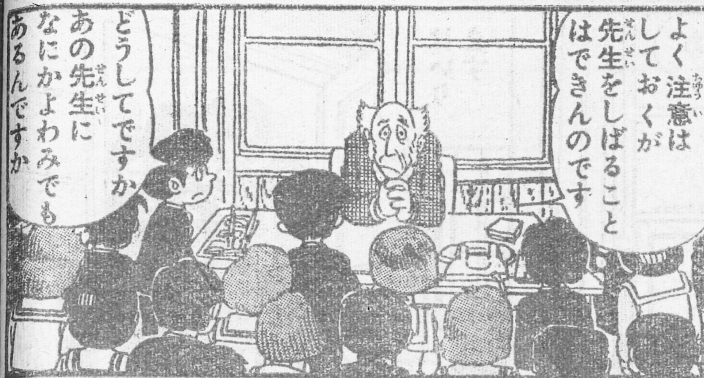
なお、その後のKCスペシャル253巻[KCSP253]『三つ目がとおる 第三集』(講談社、1986年9月6日第1刷発行)や、あるいはそれ以後の単行本における「グリーブの秘密編」は、管見ではMT108がそのまま踏襲されており、異同はないように思われる。ただし、講談社プラチナコミック63巻[KPC63]『三つ目がとおる グリーブの秘密編』(講談社、2003年5月28日第1刷発行)では、MT108の冒頭pp.8-30が削除されており、残りの部分だけが収録されている。

*京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター



図 1: 週刊少年マガジン 1975 年 6 月 1 日号での上底先生の正体

三つ目がとおる



講談社コミックス

紅の挑戦者①～⑥

もうれつ
だいはくりやく
げきとうまんが

猛烈キックがうなる大迫力の激闘漫画！

絶賛発売中！各350円



図 2: KC325 での上底先生の正体



図 3: MT108 での上底先生の正体

2.2 主な登場人物

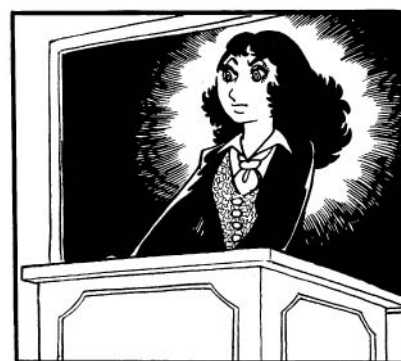
写楽保介 本作の主人公。古代三つ目族の生き残りで、第三の目を持つ。現代人類を遥かに超える高い知能を有し、脳ミソをトコロテンにする機械を作ったり、人類には解読不能な古代文字を読んだりする。第三の目をバンソウコで塞がれると、小学一年生なみの中学二年生。



和登千代子 本作のヒロイン。写楽の同級生でコイビト。お寺の娘で、住職の父親に、写楽との付き合いを禁じられている。写楽のバンソウコを、自由にはがしたり貼ったりする腕を持つ。上底先生によって、写楽と共に、ナバホ山ちかくの「グリーブ」へ連れて行かれる。



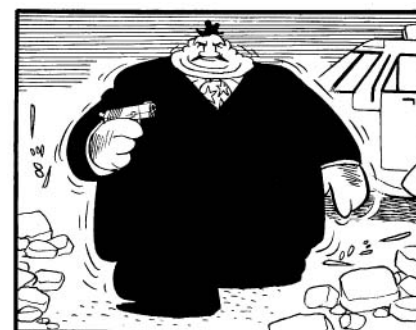
上底先生 写楽と和登の学園に赴任してきた女教師。初出では1975年5月25日号～8月10日号に登場。ICPOの捜査官であり、CIAのエージェントでもあるという設定(図1)。「グリーブ」の暴走に巻き込まれて死亡。KC325では設定が変わっており、「全ピキ連」の闘士ということになっている(図2)。また、KC325では死亡せず、写楽・和登と共に小型船で日本に帰る。一方、MT108でも「全ピキ連」の闘士という設定(図3)だが、最期は「グリーブ」の暴走に巻き込まれて行方不明となっている。



ブラック・ホーン 上底先生の夫で、ナバホ族の出身。「グリーブ」の研究者。初出では1975年7月6日号～8月17日号に登場、「グリーブ」の暴走で怪我を負い、マクドナルド・ハンパーカーに撃たれて死亡。KC325では「グリーブ」の暴走で負った怪我がもとで死亡。MT108ではポーク・ストロガノフに撃たれて死亡。



マクドナルド・ハンパーカー 初出では1975年8月10日号～8月24日号に登場。CIA部長で、写楽と和登をCIA本部に連れて行く。KC325では登場しない。MT108では登場しているものの、名前がポーク・ストロガノフに変わっている。



3 マンガにおける異同の記述

3.1 異同のレベル

一口に異同と言っても、マンガにおける異同には、様々な種類のものが存在する。本稿ではそれらの異同を、多少乱暴だが、以下の3レベルに分類することにする。

1. プロットの異同

マンガのプロット、すなわち話の筋そのものが変わっている場合。一般には、コマの異同やフキダシの異同を伴う。

2. コマの異同

コマの位置や、コマに書かれている内容が変わっている場合。

3. フキダシの異同

コマ中の人物や絵は変更されずに、フキダシの内容だけがかわっている場合。

図1(週刊少年マガジン 1975年6月1日号 pp.104-105)と図2(KC325 p.62)および図3(MT108 p.62)の異同を例に、少し考察してみよう。上底先生の横暴をやめさせるべく、生徒たちが校長に直談判するシーンなのだが、ここで明かされる上底先生の正体は、図1と図2・3では全く異なっている。すなわち、図1では、生徒たちに正体が明かされる(ICPOの捜査官)ものの、読者にはわからない。一方、図2・3では、「全ピキ連」の闘士という正体が明かされる。これが「プロットの異同」である。次に、図1と図2・3の各コマをチェックすると、図1のp.104の下半分にある5つのコマと、図1のp.105の上半分の大コマは、図2・3では使われていない。そして、図1の残りの7コマが、図2・3の1ページ(p.62)に詰め込まれている。これが「コマの異同」である。また、図2・3のうち下3段の5コマは、それぞれ図1に同一の絵柄のコマがあるものの、フキダシの内容が完全に変わっている。これが「フキダシの異同」である。

これらの異同のレベルのうち、「プロットの異同」については、自然言語で記述するしかなく、機械可読な記述は非常に難しいと考えられる。一方、「コマの異同」と「フキダシの異同」は、機械可読な記述が可能だと考えられるが、その際、著作権法に抵触しないような記述が必要である。端的には、コマの画像そのものを直接記述せずに、異同を記述する必要がある。そのような記述が可能かどうか以下で考察する。

3.2 各コマを特定するための記述

図1の各コマを仮に「1975.6.1-104A」～「1975.6.1-105D」、図2の各コマを仮に「KC325-62A」～「KC325-62G」、図3の各コマを仮に「MT108-62A」～「MT108-62G」と名づけた場合、これらのコマを特定するためには、どのような記述が必要かを考えてみる。

● 1975.6.1-104A

フキダシ右上=校長 “ま	コマ上= 1975.6.1-104 天
まってくれ ”	コマ右= 1975.6.1-104 右ハシラ
フキダシ左上=校長 “いろいろ	コマ左= 1975.6.1-104B
事情 ^{じじょう} が	コマ下= 1975.6.1-104C
あってね ”	

● KC325-62A

フキダシ右上=校長 “ま	コマ上= KC325-62 天
まってくれ ”	コマ右= KC325-62 右ハシラ
フキダシ左上=校長 “いろいろ	コマ左= KC325-62B
事情 ^{じじょう} が	コマ下= KC325-62C
あってね ”	

- MT108-62A

フキダシ右上＝校長 “ ま
待ってくれ ”
フキダシ左上＝校長 “ いろいろ
事情が
あってね ”

コマ上＝ MT108-62 天
コマ右＝ MT108-62 右ハシラ
コマ左＝ MT108-62B
コマ下＝ MT108-62C

- 1975.6.1-104B

フキダシ右上＝校長 “ よく^{ちゅうい}注意は
しておくが
^{せんせい}先生をしばること
はできんです ”
フキダシ左上＝男子生徒 “ どうしてですか
あの^{せんせい}先生に
なにかよわみでも
あるんですか ”

コマ上＝ 1975.6.1-104 天
コマ右＝ 1975.6.1-104A
コマ左＝ 1975.6.1-104 左ノド
コマ下＝ 1975.6.1-104C
コマ下＝ 1975.6.1-104D

- KC325-62B

フキダシ右上＝校長 “ よく^{ちゅうい}注意は
しておくが
^{せんせい}先生をしばること
はできんです ”
フキダシ左上＝男子生徒 “ どうしてですか
あの^{せんせい}先生に
なにかよわみでも
あるんですか ”

コマ上＝ KC325-62 天
コマ右＝ KC325-62A
コマ左＝ KC325-62 左ノド
コマ下＝ KC325-62C
コマ下＝ KC325-62D

- MT108-62B

フキダシ右上＝校長 “ よく注意は
しておくが
先生をしばること
はできんです ”
フキダシ左上＝男子生徒 “ どうしてですか
あの先生に
何か弱みでも
あるんですか ”

コマ上＝ MT108-62 天
コマ右＝ MT108-62A
コマ左＝ MT108-62 左ノド
コマ下＝ MT108-62C
コマ下＝ MT108-62D

● 1975.6.1-104C

フキダシ右上＝校長 “ いたい
ところを
つくねえ ”
フキダシ左上＝男子生徒 “ たとえば
うちの学校の
理事長の
しんせきとか
.... ”

コマ上＝ 1975.6.1-104A
コマ上＝ 1975.6.1-104B
コマ右＝ 1975.6.1-104 右ハシラ
コマ左＝ 1975.6.1-104D
コマ下＝ 1975.6.1-104E
コマ下＝ 1975.6.1-104F

● KC325-62C

フキダシ右上＝校長 “ あの人は
全ピキ連
なのです ”
フキダシ左上＝男子生徒 “ なんですか
その全ピキ
連って.... ”

コマ上＝ KC325-62A
コマ上＝ KC325-62B
コマ右＝ KC325-62 右ハシラ
コマ左＝ KC325-62D
コマ下＝ KC325-62E
コマ下＝ KC325-62F

● MT108-62C

フキダシ右上＝校長 “ あの人は
全ピキ連
なのです ”
フキダシ左上＝男子生徒 “ なんですか
その全ピキ
連って.... ”

コマ上＝ MT108-62A
コマ上＝ MT108-62B
コマ右＝ MT108-62 右ハシラ
コマ左＝ MT108-62D
コマ下＝ MT108-62E
コマ下＝ MT108-62F

● 1975.6.1-104D

フキダシ右上＝校長 “ そんな
よく
学園マンガに
あるような
ものじゃ
ないんだ ”

コマ上＝ 1975.6.1-104B
コマ右＝ 1975.6.1-104C
コマ左＝ 1975.6.1-104 左ノド
コマ下＝ 1975.6.1-104F
コマ下＝ 1975.6.1-104G

● KC325-62D

フキダシ右上＝校長 “ 「全女性
ピンカラ
キリマデ
連盟」
というので
す！ ”

コマ上＝ KC325-62B
コマ右＝ KC325-62C
コマ左＝ KC325-62 左ノド
コマ下＝ KC325-62F

- MT108-62D

フキダシ右上＝校長 “ 「全女性
ピンカラ
キリマデ
連盟」
というので
す！ ”

コマ上＝ MT108-62B
コマ右＝ MT108-62C
コマ左＝ MT108-62 左ノド
コマ下＝ MT108-62F

- 1975.6.1-104E

フキダシ右上＝男子生徒 “ じゃあ
なんとか
組の
ボスの
.... ”

コマ上＝ 1975.6.1-104C
コマ右＝ 1975.6.1-104 右ハシラ
コマ左＝ 1975.6.1-104F
コマ下＝ 1975.6.1-104H

- 1975.6.1-104F

フキダシ右上＝校長 “ ちがうったら
そういう
ものとは
関係ない ”

コマ上＝ 1975.6.1-104C
コマ上＝ 1975.6.1-104D
コマ右＝ 1975.6.1-104E
コマ左＝ 1975.6.1-104G
コマ下＝ 1975.6.1-104H
コマ下＝ 1975.6.1-104I

- 1975.6.1-104G

フキダシ右上＝男子生徒 “ はっきり
いって
ください ”
フキダシ左上＝男子生徒 “ でないと
ぼくたち
ストをしますよ ”

コマ上＝ 1975.6.1-104D
コマ右＝ 1975.6.1-104F
コマ左＝ 1975.6.1-104 左ノド
コマ下＝ 1975.6.1-104I

- 1975.6.1-104H

フキダシ右上＝校長 “ よわったな
ウン....
じゃあ
これを
見せよう ”

コマ上＝ 1975.6.1-104E
コマ上＝ 1975.6.1-104F
コマ右＝ 1975.6.1-104 右ハシラ
コマ左＝ 1975.6.1-104I
コマ下＝ 1975.6.1-104 地

- 1975.6.1-104I

コマ上＝ 1975.6.1-104F
コマ上＝ 1975.6.1-104G
コマ右＝ 1975.6.1-104H
コマ左＝ 1975.6.1-104 左ノド
コマ下＝ 1975.6.1-104 地

● 1975.6.1-105A

フキダシ左上＝“ あっ ”

フキダシ左＝男子生徒 “ あっ ”

コマ上＝ 1975.6.1-105 天

コマ右＝ 1975.6.1-105 右ノド

コマ左＝ 1975.6.1-105 左ハシラ

コマ下＝ 1975.6.1-105B

コマ下＝ 1975.6.1-105C

● 1975.6.1-105B

フキダシ左上＝校長 “ …… こういうわけだ

事情^{じじょう}はいえんが

あの先生^{せんせい}は この学校^{がっこう}では

すぎにふるまえるんだ…… ”

コマ上＝ 1975.6.1-105A

コマ右＝ 1975.6.1-105 右ノド

コマ左＝ 1975.6.1-105C

コマ左＝ 1975.6.1-105D

コマ下＝ 1975.6.1-105 地

● KC325-62E

フキダシ左上＝校長 “ あの^{ひと}人をおこらせたり

すると 全世界^{ぜんせかい}の

五百万人^{まんにん}の女^{おんな}が政府^{せいふ}へ

どなりこんで この学校^{がっこう}を

ぶつつぶしてしまいます！ ”

コマ上＝ KC325-62C

コマ右＝ KC325-62 右ハシラ

コマ左＝ KC325-62F

コマ左＝ KC325-62G

コマ下＝ KC325-62 地

● MT108-62E

フキダシ左上＝校長 “ あの^{ひと}人をおこらせたり

すると 全世界^{ぜんせかい}の

五百万人^{まんにん}の女^{おんな}が政府^{せいふ}へ

どなりこんで この学校^{がっこう}を

ぶつつぶしてしまいます！ ”

コマ上＝ MT108-62C

コマ右＝ MT108-62 右ハシラ

コマ左＝ MT108-62F

コマ左＝ MT108-62G

コマ下＝ MT108-62 地

● 1975.6.1-105C

フキダシ右上＝女子生徒 “ でも

あんまり

だわ ”

フキダシ左上＝男子生徒 “ よりによって

この学校^{がっこう}へ

くるなんて

ひどいや ”

コマ上＝ 1975.6.1-105A

コマ右＝ 1975.6.1-105B

コマ左＝ 1975.6.1-105 左ハシラ

コマ下＝ 1975.6.1-105D

● KC325-62F

フキダシ右上＝女子生徒 “ じゃあ

しかたが

ないわね ”

フキダシ左上＝男子生徒 “ 女^{おんな}ってのは

いま 男^{おとこ}の

十倍^{ばい}も

つよいて

からなア ”

コマ上＝ KC325-62C

コマ上＝ KC325-62D

コマ右＝ KC325-62E

コマ左＝ KC325-62 左ノド

コマ下＝ KC325-62G

● MT108-62F

フキダシ右上＝女子生徒 “ じゃあ
しかたが
ないわねえ ”
フキダシ左上＝男子生徒 “ 女ってのは
いま男の
十倍も
強いって
からなア ”

コマ上＝ MT108-62C
コマ上＝ MT108-62D
コマ右＝ MT108-62E
コマ左＝ MT108-62 左ノド
コマ下＝ MT108-62G

● 1975.6.1-105D

フキダシ右上＝和登千代子 “ あたし
^{がっこう}学校を
やめたく
なったわ ”

コマ上＝ 1975.6.1-105C
コマ右＝ 1975.6.1-105B
コマ左＝ 1975.6.1-105 左ハシラ
コマ下＝ 1975.6.1-105 地

● KC325-62G

フキダシ右上＝和登千代子 “ ボク
十倍も
つよくない
よ 一倍半^{ばいはん}
ぐらいよ ”

コマ上＝ KC325-62F
コマ右＝ KC325-62E
コマ左＝ KC325-62 左ノド
コマ下＝ KC325-62 地

● MT108-62G

フキダシ右上＝和登千代子 “ ボク
十倍も
強くないよ
一倍半
ぐらいよ ”

コマ上＝ MT108-62F
コマ右＝ MT108-62E
コマ左＝ MT108-62 左ノド
コマ下＝ MT108-62 地

各コマのフキダシと相対位置を記述しただけのものだが、各コマを特定するという点では、これにト書きを加えればほぼ十分だと考えられる。仮に、複数ページに渡るコマであっても、「コマ上」や「コマ下」が複数ページに渡るというだけで、記述には困らない。あるいは、矩形でないコマであっても、上下左右には何がしか存在しているはずなので、それを記述すればよい。極端な話、コマと呼べるものが存在しない場合でも、ページを区分している単位があるのなら、それを順不同に記述すればいいだろう。

ただし、上の例では、フキダシの話者を記述に含めたが、話者は無くてもよいような気がする。特に、1975.6.1-104Hのフキダシの話者は、ここでは「校長」としているが、それは前後関係が無ければ特定できない。あるいは、絵柄上は同一人物であっても、初出では「マクドナルド・ハンパーガー」で、MT108では「ポーク・ストロガノフ」になってしまうという問題もある。そういうややこしさを考えると、あるいは話者を記述しない方が良いのかもしれない。

また、上の例では「コマ左」と「コマ下」を記述したが、通常の矩形のコマだけの場合は、「コマ上」と「コマ右」だけで十分である。ただし、タチキリ(コマの端がページの端より外

にある)の場合には、たとえば「コマ下 = bbb-pp タチキリ」のように記述すべきだと考えられることから、とりあえずは「コマ上」「コマ右」「コマ左」「コマ下」を全て記述しておくことにした。

3.3 機械可読な異同の記述

各コマの記述をもとに、「コマの異同」と「フキダシの異同」をどのように記述するかだが、これは端的に言えば、異同を記述するのではなく、コマの絵柄上の同一性を記述すればよい。すなわち、前節の例で言えば

1975.6.1-104A \cong KC325-62A \cong MT108-62A
1975.6.1-104B \cong KC325-62B \cong MT108-62B
1975.6.1-104C \cong KC325-62C \cong MT108-62C
1975.6.1-104D \cong KC325-62D \cong MT108-62D
1975.6.1-105B \cong KC325-62E \cong MT108-62E
1975.6.1-105C \cong KC325-62F \cong MT108-62F
1975.6.1-105D \cong KC325-62G \cong MT108-62G

という記述が、それにあたる。これにより、同一だと認められなかったコマ、すなわち 1975.6.1-104E、1975.6.1-104F、1975.6.1-104G、1975.6.1-104H、1975.6.1-104I、1975.6.1-105A に「コマの異同」があることがわかる。

これに加え、1975.6.1-104C の下にあるコマと、KC325-62C の下にあるコマは、同一ではない。1975.6.1-104D の下にあるコマと、KC325-62D の下にあるコマも、同一ではない。また、1975.6.1-105B の上にあるコマと、KC325-62E の上にあるコマは、同一ではない。1975.6.1-105C の上にあるコマと、KC325-62F の上にあるコマも、同一ではない。したがって、KC325-62C と KC325-62D の下、KC325-62E と KC325-62F の上にある「隙間」に、「コマの異同」が潜んでいることが理解できる。MT108 についても同様である。

一方、絵柄上の同一性が認められるコマどうしであっても、前節の記述におけるフキダシに相違があれば「フキダシの異同」があることがわかる。たとえば、1975.6.1-104C と KC325-62C は同一のコマだが、フキダシの記述は全く異なっており、「フキダシの異同」があるといえる。1975.6.1-104C と MT108-62C との間にも「フキダシの異同」がある。ただ、KC325-62C と MT108-62C との間は、ルビの有無だけの違いであり、これを「フキダシの異同」と呼ぶべきかどうか悩ましい。さらにややこしいのが KC324-62F と MT108-62F の差であり、かな漢字の変更や語尾のちょっとした変化を「フキダシの異同」とするかどうかは、かなり難しいところである。なお、これらの細かい差異を全て「フキダシの異同」とみなした際には、フキダシも含めて全く同一のコマは、以下のように記述できる。

1975.6.1-104A \equiv KC325-62A
1975.6.1-104B \equiv KC325-62B

3.4 コマの絵柄上の同一性

前節では「コマの絵柄上の同一性」というものが、ア priori に与えられるかのような説明をおこなったが、この点に関してはいくつか考慮すべき事項がある。

多色刷の場合

初出で四色刷あるいは二色刷であったにもかかわらず、単行本で一色刷となっている場合は、かなりある。これらのコマに関しては、あえて同一だとみなして「 \cong 」で繋いでおくべきだろう。

コマに加筆がおこなわれている場合

初出になかった人物や事物あるいは書き文字が、コマの中に書き加えられている場合。あるいは、スクリーン・トーンやベタが直されている場合。これらのコマを同一だとみなすことはできないが、何がしかの関係づけをおこないたいのも事実である。とりあえず、これらのコマについては、たとえば「 \sim 」のような関係演算子でコマどうしを繋いでおく、というのも一案だろう。

コマに変形が加えられている場合

コマの形が変えられている場合。あるいはコマを回転したり、鏡像を用いた場合。このようなコマについても、とりあえず「 \approx 」のような関係演算子でコマどうしを繋いでおく、というのも一案だろう。

タチキリの変更による場合

タチキリのコマは、週刊誌と単行本で余白部分の取り方がかなり異なるため、コマの端が変わってしまったり、あるいはタチキリでなくなったりする場合もある。程度にもよるが、変更が小さい場合はあえて「 \cong 」で、大きい場合は「 \approx 」で、コマどうしを繋いでおくのも一案だろう。

4 おわりに

マンガにおける「コマの異同」と「フキダシの異同」を、記述する方法について考察した。具体的には、各コマの相対位置記述とフキダシの記述をおこない、さらに「コマの絵柄の同一性」を記述することによって、「コマの異同」と「フキダシの異同」の双方を、同時に記述できることを示した。

また、この手法で『三つ目がとおる グリープの秘密編』の各コマの記述をおこない、週刊少年マガジン(初出)と講談社コミックス[KC325]と手塚治虫全集[MT108]との間の異同を、実際に確認した。異同を確認した結果、コマの対応関係はかなり複雑なものとなってしまったため、読みやすいようページ毎の対応に直して、次ページ以降に示す。

週刊少年マガジン		KC325	MT108
第1章 先生も狂った！			
1975.1.19/26 号	pp.10-17	pp.8-15	pp.8-15
	p.18 と p.24	p.16	p.16
	p.25	p.17	p.17
1975.2.23 号	pp.112-116	pp.18-22	pp.18-22
1975.1.19/26 号	pp.26-27	pp.23-24	pp.23-24
1975.2.2/9 号	p.59	p.25	p.25
	p.60 と p.61	p.26	p.26
	p.63	p.27	p.27
-		pp.28-30	pp.28-30
1975.3.23 号	pp.123-124	pp.31-32	pp.31-32
	p.126 と p.129 と p.128	p.33	p.33
	p.130	p.34	p.34
1975.3.30 号	pp.90-96	pp.35-41	pp.35-41
1975.6.8 号	pp.78-84	pp.42-48	pp.42-48
第2章 悪魔のような女			
-		p.50	p.50
1975.6.1 号	pp.92-93	pp.51-52	pp.51-52
	p.94	p.53	p.53
	p.95		
	p.96	p.54	p.54
1975.6.15 号	p.127 と p.128	p.55	p.55
	p.129	p.56	p.56
1975.6.1 号	p.97		
	pp.98-99	pp.57-58	pp.57-58
	p.100	-	
	pp.101-103	pp.59-61	pp.59-61
	p.104 と p.105	p.62	p.62
	pp.106-110	-	
1975.6.8 号	p.87-89	pp.63-65	pp.63-65
	p.90	-	
	p.91	p.66	p.66
	p.92	p.67	p.67
1975.6.15 号	p.121	p.68	p.68
	p.122		
	pp.123-127	pp.69-73	pp.69-73
	pp.131-134	pp.74-77	pp.74-77

週刊少年マガジン		KC325	MT108
1975.6.22 号	p.124	-	
	p.125 と p.126	p.78	p.78
	pp.127-128	pp.79-80	pp.79-80
	p.129	p.81	p.81
	p.130		
	p.131		
	p.132	p.83	p.83
	p.133		
	1975.6.8 号	p.84	p.84
p.85 と p.86			
	p.96	p.85	p.85
1975.6.15 号	p.117	p.86	p.86
1975.6.8 号	p.94	p.87	p.87
	p.95	p.88	p.88
1975.6.15 号	p.118		
	p.119	p.89	p.89
1975.6.8 号	p.95		
1975.6.15 号	p.129	p.90	p.90
1975.6.22 号	p.133		
第3章 死の谷			
1975.6.22 号	pp.134-135	pp.92-93	pp.92-93
	p.136	-	
	p.137	p.94	p.94
	p.138	p.95	p.95
		p.96	p.96
	p.139	p.97	p.97
	pp.140-142	pp.98-100	pp.98-100
1975.6.29 号	p.27	p.101	p.101
	pp.28-29	-	
	pp.30-31	pp.102-103	pp.102-103
	p.32	-	
	pp.33-41	pp.104-112	pp.104-112
	p.43	p.113	p.113
	p.44 と p.45	p.114	p.114
	pp.46-48	pp.115-117	pp.115-117
	pp.49-50	-	
	pp.51-52	pp.118-119	pp.118-119

週刊少年マガジン		KC325	MT108
1975.7.6 号	p.92	p.120	p.120
	p.93		
	p.94	p.121	p.121
	pp.95-96		
	pp.122-123		
	p.94	p.124	p.124
	p.97		
pp.98-110	p.125	p.125	
	pp.126-138	pp.126-138	
第4章 ナバホ・ポイント			
1975.7.13 号	p.94	p.140	p.140
	p.95	p.141	p.141
	p.96		
	p.98	p.142	p.142
	pp.99-105		
	pp.106-108	-	
	pp.109-112	pp.150-153	pp.150-153
1975.7.20 号	p.64	p.154	p.154
	p.65 と p.66	p.155	p.155
	p.67 と p.69	p.156	p.156
	p.70	p.157	p.157
	p.71		
	p.77	p.158	p.158
	pp.72-76		
1975.8.10 号	pp.41-44		pp.159-162
第5章 満月の奇蹟			
1975.7.20 号	pp.78-82	pp.160-164	pp.164-168
1975.7.27 号	pp.44-46	-	
	pp.47-54	pp.165-172	pp.169-176
	pp.57-63	pp.173-179	pp.177-183
1975.8.3 号	pp.64-65	-	
	pp.66-79	pp.180-193	pp.184-197
	p.80	-	
	pp.81-82	pp.194-195	pp.198-199
	p.83	-	
1975.8.10 号	pp.38-40	pp.196-198	pp.200-202
	p.46	p.199	p.203
1975.7.27 号	pp.55-56	pp.200-201	pp.204-205

週刊少年マガジン		KC325	MT108
1975.8.10 号	pp.47-48	pp.202-203	pp.206-207
	-	pp.204-205	pp.208-209
1975.8.10 号	pp.49-51	pp.206-208	pp.210-212
	p.52 と p.53	p.209	p.213
	pp.54-56	-	
	-	pp.210-212	pp.214-216
		pp.213-215	-
1975.8.17 号	pp.108-112	-	pp.217-221
	p.113 と p.115		p.222
	pp.116-117		pp.223-224
	pp.119-120		pp.225-226
	p.121		p.227
	p.123		
	p.124		p.228
	pp.125-126		pp.229-230
1975.8.24 号	pp.84-101		pp.231-248
	-	p.216	p.249
1975.8.24 号	p.102	-	p.250
	-	pp.217-218	-
		p.219	p.251

ただし、本稿の手法はあくまで、作業者が実際に目で確認した「コマの絵柄の同一性」を、記述していくための手助けとなるに過ぎない。「コマの絵柄の同一性」を自動抽出するような画像ツールと組み合わせる、というのが一案なのだが、それを著作権法に違反せずにおこなえるのか、たとえおこなえたとして、それを公に発表することが可能なのか、今後その点が問題となるだろう。

なお、『三つ目がとおる』の異同に関しては、

http://ngt-the-knife.sakura.ne.jp/rep_mitusme.shtml

が非常に詳しく、本稿の執筆においても助けていただいた。作者の ngt 氏に謝意を述べる次第である。